

第1回 中部の地域づくり委員会 議事概要

1. 日 時

平成28年12月13日（火） 10:30～12:00

2. 場 所

名古屋合同庁舎第1号館11階第一会議室

3. 出席委員

奥野信宏座長、内田俊宏委員、小川正樹委員、後藤澄江委員、佐々木眞一委員、森川高行委員

4. 内 容

(1) 開会挨拶

(2) 委員会の設立

(3) 座長の選出

- ・奥野委員が座長に選出された

(4) 議 事

①広域地方計画の具体的な推進方策について

②リニア時代の“ものづくり”対流拠点形成の検討について

上記について、事務局から説明。その後、意見交換が行われた。

各委員から出た主な意見は以下のとおり。

○ものづくり関連

(内田委員)

- ・ 首都圏はサービス産業、情報通信産業の集積が高く、自動運転技術、IoT、車のIT化など、次世代自動車分野で中部の自動車産業と首都圏の情報通信産業の相乗効果が期待される。
- ・ 航空宇宙産業とロボット産業では北陸との相乗効果が期待される。航空機への炭素繊維複合材部品の適用、ロボットサミットの開催や医療ロボット、介護支援ロボット、建設現場でのアシストスーツ研究開発などで協力できるのではないか。

(小川委員)

- ・ 世界でIoTや国際化、人口減少が進んでいく中、中部にはプラスでリニアがあるという視点で捉え、中部のものづくりがどのように変わっていくかを考える必要がある。今後、日本のマーケットが縮小する中では、ものを作る現場は海外へ出ていき、中部はものづくりの頭脳を担っていくことになる。ものをつくるだけでなく、コトをつく

る、ソフト、IT、自動運転などを付加していくことが重要である。例えば、今後のものづくりを考えると、自動車はエンジン駆動から電動へシフトしていくと考えられる。この地で作るものは、鋳物から電子部品に変化する。そうすると、内陸側でもメリットのある地域が出てくるのではないか。また、物流も変化する。このような外部環境を検討した上で、リニアをどう活かしていくかという議論ができるとうい。

- ・ また、このようなものづくりの変化を考えたとき、世界からどのように頭脳を集めるか、世界からどのように人に来てもらうかが重要であり、地域全体の魅力作りも欠かせない。
- ・ 地域創生の観点で、地域の地場産業をどのように海外とつなげていくかなど、ものづくりの意見聴取において、注視していく必要がある。

(後藤委員)

- ・ 中部はものづくりが強いので、リニア開通後、ものづくりへの効果が大きいことは納得できる。一方、これからの社会は先行きが見えない変動要因が多い時代なので、ものづくりがどう変化していくかという観点からデータを見る必要がある。
- ・ 医療や介護の現場へのヒアリングでは、医療現場や福祉現場にどうITやロボットを導入して生産性を高め、人口減少を補っていくかが課題であり、この課題に対し、中部がものづくりを活かして発信できれば、日本の問題の解決にもつながるのではないか。現場の方たちの意識、ニーズ等がある程度踏まえないと活用されない。生産性といったことだけでは、それを使う気持ちにはならない。
医療現場や福祉現場を支えているものを開発しようとされている方々が、どんな意識を持って開発されているかが興味深い。同時に、こういったところにこそ、ビッグデータを活かしていただき、利用者のニーズをくみ取って、現場に活用していただきたい。この分野はこの地域が先駆的にできると期待している。

(佐々木委員)

- ・ 中部は日本のものづくりの中核でありたい。今後IoT、ビッグデータなど変化していくが、その最先端をいき日本をリードしていきたいという思いがある。
そのような観点では、中部圏のものづくりは現状、健全な収益が上がっており、危機感がやや乏しい状況にある。中部圏の企業が危機感を持つように促進していきたい。
日本全体では、危機感をもってビジネスモデルを変えていく会社がたくさんある。
- ・ 地価が安く、高速大容量通信インフラが整った用地をリニア中間駅周辺に整備し、企業が立地しやすい環境を整える。先進的な企業はシステムを考えるが、最後はものにしてお客様にお届けして、初めて価値を生む。そのような相乗効果を狙う意味で、リニア駅を中心としたインフラの充実を図ってはどうか。

(森川委員)

- ・ 広域地方計画策定から背景が変わってきたと感じるのは、インダストリー4.0の流れが加速している。ものがつながり、ものが考え、それによって人間は単純労働から解放

される。

- ・それが最初に起きそうなのがモビリティ。車がつながり考えて走る社会となり、必要などきにモビリティを使う、モビリティ・アズ・ア・サービス、シェアリング・エコノミーが進展し、車は売れなくなるが、賢くなり付加価値の高いものになる。中部のものづくりはこれまでのものづくりではなく、モビリティ・アズ・ア・サービスに向かっていく方向に舵を切らないと置いていかれる。「ものづくり」ではなく、「ものづかい」イノベーション地域に転換する必要がある、今後の地域の発展にはイノベーションが重要。自動運転は、知能、部品を海外へ求めており、日本のイノベーションのなさが目立つ。
- ・日本国中に優秀な研究者は生まれているが、東京で働きたいという人が多い。そういう人たちが住みたくなる地域になる必要がある、リニアをそのために使っていくことが求められる。

(奥野座長)

- ・名古屋に来れば頭脳があると言われるようになることがまちづくりの目標だと思う。東京はアメリカと競争しており、アメリカと比べると東京は負けてしまう。名古屋がイノベーションセンター的なもので優位にあるかについては、リニアができれば、東京の大学は近くなるし、名大はあるし、関西の京大、阪大とも近くなる。地価が若干安いこと、空港もあることを考慮すれば、それに見合うような研究環境、住宅環境を作れば十分競争になる。オフィスは名古屋駅の近接、200~300mの範囲内で相当いいものを作らないといけない。

○ワークスタイル・ライフスタイル関連

(内田委員)

- ・愛知県は、若年男性が他地域から流入しているが、若年女性は首都圏へ流出超過となっている。リニア時代を踏まえると男女間の人口バランスが悪くなる可能性がある。女性は大都市圏の魅力に対する評価が高いので、名古屋の女性を意識したまちづくりや、女性の活躍の場を雇用の受け皿を拡げる必要がある。

(小川委員)

- ・テレワークは、生活のしやすい、この地に居住していただくための一つの方策である。名古屋に住んで東京に週2回通勤するなどの需要も考えられる。名古屋のみならず、飯田や中津川周辺も含め、この地域への定住・移住を進めるとともに、女性もこの地域で楽しめる魅力のある街へ発展していく必要がある。

(後藤委員)

- ・これからのものづくりは、高度化し知識があつまり、新たな人々のニーズに合うような、人々の暮らしの課題を解決するようなものを作っていくことが大事である。女性の視点が非常に重要であり、この地域から流出している女性というのは、より進

んだことに興味を持つような人たちである。流出した女性のニーズをくみ取るようなこともやっていくことで、本当の意味で、日本から、世界から求められているもの、新しい今後に必要なものの開発が進むと思う。

男性の視点だけのものづくりではなく、男女共々の、高らかなニーズを十分活かせるようにすべきである。この地域がそのニーズをくみ取った生活環境や、新たなライフステージを提示できるような空間づくりができれば、自然に、海外からも人々が集まってくると思う。

歴史、伝統を活かしたものづくりの強みは継承していかなければいけないが、同時にあらたなものも開発してほしい。

(佐々木委員)

- ・ 仕事がスマートになり、自分の価値を生み出し、自分のインテリジェンスを発揮できる仕事が主流になれば、女性にとって魅力的になる。ダイバーシティも実現できる。IoT、AI、ビッグデータを利用して仕事をスマートに進められる企業を増やすことが必要。それには、教育、人材育成からはじめないといけない。研究者を集めて、中部圏からの働き方改革が実現されると、インフラ整備と相まって、ものづくりの知が集積し、日本を牽引するポテンシャルを高められるのではないか。
- ・ いろいろな方の意見を集める機会なので、先端的な研究をされている機関の方やアカデミアの先生の意見を聞けるとよい。

(奥野座長)

- ・ 最近、労働時間の問題が出てきているが、労働時間の減少、女性・高齢者のロングキャリア、保育環境など、ワークライフバランスで一番優位な立場にあるのは名古屋であり、住宅の広さ、土地のことにしても、通勤時間にしても、非常に有利な状況にある。付加価値の高いものづくりを追及しなければいけない。

○観光・交流関連

(内田委員)

- ・ 観光関連では、昇龍道の連携があるが、名古屋駅、名古屋港、セントレアを結ぶ新たなネットワークの構築が必要。
水上バスで笹島、ガーデンふ頭、金城ふ頭、中川運河をまわったり、金城ふ頭のJRリニア鉄道館、レゴランド、クルーズ船の停泊など、旅行商品が「もの」から「体験」型へシフトする中、名駅からのアクセスを活かし、狭いエリアで新たなルート構築をしてはどうか。

(小川委員)

- ・ この地域がリニアで来ていただく目的地となるよう魅力向上を図っていく必要がある。
- ・ 飯田や中津川を含め、この地域の魅力を発信しこの地域に降りてもらおうとともに、この地域からも出て行きやすくする、双方向の流れが重要である。

(森川委員)

- ・ リニアを使った比較優位性を考えると、この地域は人が集まる「まんなか」なので、ミーティング、コンベンションを進める必要がある。サミット、コンベンションだけでなく、日々の企業、大学のミーティング、カンファレンスなど、まんなか性を活かして開催する必要がある。

○インフラ関連

(小川委員)

- ・ 観光の振興に加え、ものづくり産業の発展のためにも、海外の高度人材が集まるなど海外とのパイプがより強くなるよう、セントレアの2本目滑走路を整備していただく必要があると思っている。

(奥野座長)

- ・ 中部圏のスーパーメガリージョンとして、存在感の発揮を真剣に考えなければいけない。首都圏は、スーパーメガリージョンについて、かなり熱心であり、首都圏を中心に、東北・北陸までを含むスーパーメガリージョンを考えている。
首都圏は、東西南北に対する交通網（高速道路・新幹線）が整備されており、強力なので、首都圏を中心としたスーパーメガリージョンにならないようにしなければならない。
- ・ 名古屋の場合には、東西の交通は非常に強いが、南北が弱い。スーパーメガリージョンの中に埋没するのではなく、リードしなくてはならない。
MRJのクラスター等も、素材関係は北陸の方から、松阪や飯田の方まで、かなり広域になってきており、産業クラスターも進んできているので、北陸を含むスーパーメガリージョンという意識が必要である。高山方面は鉄道が弱いので、やはり東海北陸自動車道だと思う。飛騨清見から北の4車線化は急務である。
- ・ 名古屋駅のアクセス(高速道路)は非常に大事なことであると思うが、岐阜までの高速道路がないのが問題。
- ・ 空港の2本目滑走路についても、リニアが出来るまでには完成するとよい。新大阪から関西空港へ行くのがいいか、セントレアに行くのがいいか選択が可能となり、関西方面からの需要を考えなくてはならない。

(森川委員)

- ・ 北陸新幹線について小浜ルートが優位との新聞報道があったが、北陸との連携強化のためには米原、敦賀をつなぐことは重要である。

○その他

(後藤委員)

- ・ この地域のゆとりある空間がどういうところにあるかを考える必要がある。

農村地域や中山間地域では人口が減少し、空き家や空き地はあるものの、ゆとりがあることでかえってそれらを外部に開放せず、変えたくないという意識となっている場合もあると思う。そういった方たちが、ゆとりある空間を、一緒になり、どのように活用していこうかと思うようなことを、具体的に空間の活用方法を考えていくことが必要である。

(奥野座長)

- ・ OECD が第二次国土形成計画、全国計画を非常に高く評価してくれて、レポートも出しているが、名古屋にも随分注目をしている。OECD を通じて、名古屋の情報発信をしていくことも大事だと思っている。

(5) その他

- ・ 次回の主要企業等への意見聴取は、今後調整するが、年度内 2 月頃開催予定。

(6) 閉会

(以上)